糖尿病サポートチームにおける看護職員を対象としたインスリン勉強会の効果と課題の検討

Effects on nurses who attended insulin seminar demonstrated by DM support team

信州大学医学部附属病院　糖尿病サポートチーム
矢口優貴　遠藤洋子　前かおり　高橋良恵　三井貞代　高橋法恵
矢嶋美雪　草間恵里　下山厚子　細川真奈美　中村未生
石嶺南生　竹澤崇　村井健太郎　佐藤亜位　駒津光久

〈**要旨**〉【目的】当院看護師のインスリンに対する知識の現状を知り，糖尿病サポートチームの課題を明らかにした。【方法】各病棟で勉強会を開催。研究者が作成した独自の質問紙を用い，勉強会の前後に調査を実施。【結果】勉強会前（以下，前とする）の正答率:80.5%，勉強会後（以下，後とする）後:87%。作用・手技・管理の全てのカテゴリーにおいて，後調査の正答率が優位に高かった。【結論・考察】1）サポートチームによる勉強会の開催は，看護師のインスリン知識の向上に効果がある。2）前後共に作用に関する知識が最も不足していた。

キーワード：院内勉強会，インスリン，看護師

1．はじめに

現在，日本人の４人に１人は糖尿病を有すると言われており，看護師は基礎疾患に糖尿病をもつ患者に関わる機会が多い。また，糖尿病治療もインクレチン製剤や多種類のインスリン製剤の登場により，より複雑化している現状がある。当院においても，インスリン製剤は１８種類，インクレチン製剤は３種類と数多く採用しており，看護師は糖尿病に関する正しい知識と技術を習得することが求められている。

しかし，院内では看護師へ糖尿病の治療について教育する機会は少なく，糖尿病を専門とする部署以外に所属する看護師は，曖昧な知識のまま糖尿病患者と関わっている現状がある。

当院糖尿病サポートチーム(以下サポートチーム）は,院内の糖尿病に関係する医師やコメディカルが所属しており，糖尿病に関するスタッフや患者の知識向上を目的として，月1回のチーム会開催や院内勉強会開催，世界糖尿病デーの院内イベント開催等の活動を行っている。

今回，当院看護師のインスリンに対する知識の現状と勉強会の効果を明らかにし，今後の糖尿病サポートチームの活動の課題を検討したので，報告する。

2．目的

当院看護師のインスリンに対する知識の現状を知り，糖尿病サポートチームとして，知識の普及活動の課題を明確にする。

3．研究方法

1）対象　当院に勤務する看護師640名

2）調査方法

研究者が,①インスリンの作用(以下,作用)②インスリン自己注射の手技（以下，手技）③インスリンの管理（以下，管理）の３つのカテゴリーで計９問からなる独自の質問紙を作成。勉強会実施前後に同様の質問紙を使用し，事前調査・事後調査を行った。

事前調査は勉強会前に質問紙を病棟毎に配布し，回答して頂いたものを後日回収。事前調査回収後，糖尿病サポートチームメンバーが病棟毎に訪問し，30分間の勉強会を開催。勉強会の内容は，質問紙に沿った内容を中心に行った。事後調査は，勉強会直後に質問紙を回答していただき，その場で回収した。

回収した質問紙を研究者が採点,カテゴリー毎の正答率を出し,有意差があるか分析した。

3）分析方法　フィッシャーの正確確率検定を用いた。

4）調査期間　2012年５月～９月。

5）倫理的配慮

（1）研究への参加は任意であり，研究に参加しない場合でも不利益を受けないことを説明し，知識調査用紙の提出をもって，研究参加に同意を得られたものとする。

（2）質問紙は無記名とする。

（3）質問紙は研究者が責任を持って鍵のかかるロッカーへ保管し，研究終了後質問紙は速やかに破棄する。

（4）研究者の所属機関の倫理委員会の承認を得た。

4．結果

1）回収率

事前調査の回収数は全看護師640名中380名であり，回収率は59.4％であった。勉強会の参加者は211名，勉強会参加者の事後調査回収率は100％であったため，全看護師640名に対する回収率は33％であった。

2）全体の結果

全体の正答率は事前調査では80.5％，事後調査では87％であった。

質問種類別での正答率は，①作用については事前調査では60.7ては事前調査では93.9％，事後調査では98.6％，③管理については事前調査では87％，事後調査では90.8％であった。

カテゴリー毎の事前調査，事後調査での正答率を検定した結果，作用，手技，管理と全てのカテゴリーにおいて事後調査の方が有意に正答率が高かった。

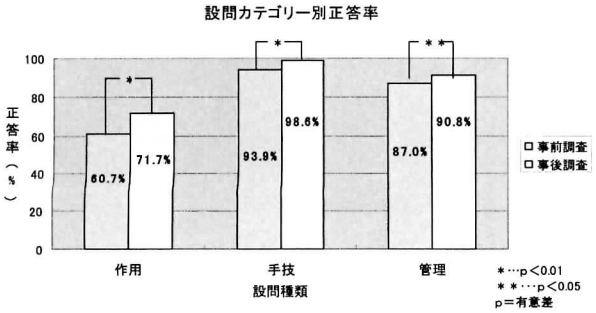

図1

3）経験年数別の結果

経験年数別の正答率を検定した結果，有意差は認められなかった。

また，設問別の結果においても有意差は認められなかった。

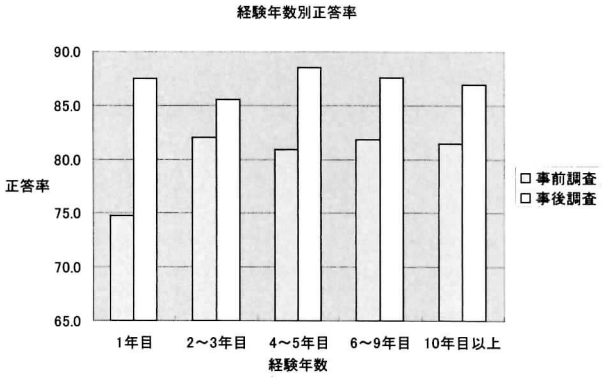

図2

4）病棟別の結果

病棟別の平均点を検定した結果，有意差認められなかった。

また，参加者数に偏りがあり，勉強会前後の点数にばらつきがあった。

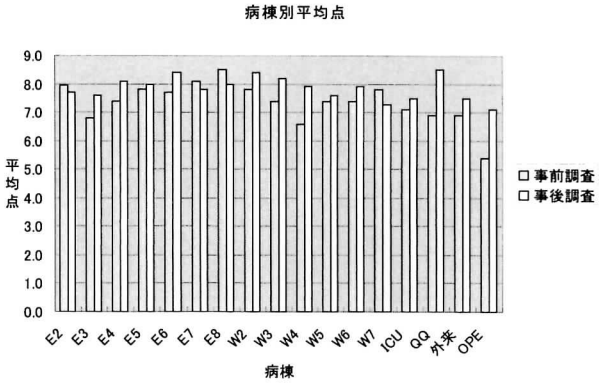

図3

5．考察

今回，糖尿病サポートチームメンバーが各病棟に伺い勉強会を行った。病棟間で参加者数にばらつきはあったが，勉強会への参加率は３３％であり，参加者が少なかったといえる。原因としては，勉強会開催へのアピール不足が考えられる。また，インスリン注射は日常業務で使用しているものであり，普段使い慣れているため，理解しているつもりになり参加意欲が低くなっている可能性もある。しかし，近年インクレチン製剤などの新しい治療方法が導入されているため，看護師は常に知識の更新が必要である。糖尿病患者に関わる機会が多い看護師には知ってもらいたい知識でもあるため，勉強会への参

加を強くアピールする事が必要である。

全体の正答率では80.5％→87％へ上昇。また，設問カテゴリー毎にみても全て有意に上昇しており，勉強会は効果があったと言える。

しかし，作用については事後調査でも71.7％と他のカテゴリーに比べて正答率は低く，知識が不足していると思われる。インスリン製剤は他種類に及び，それぞれの作用発現時間や持続時間は異なる。また，基礎分泌を補うものや追加分泌を補うものなど作用も異なり，理解するのが難しく知識が不足していると考えられる。

手技については，正答率は高いが，患者に対して安全に実施するため，また患者自身が正しい手技で実施できているか評価するための基本的な知識である。そのため，全てのスタッフが理解している必要がある。

管理については，手技に比べ直接介入する機会が少ないため，曖昧な知識のまま行っている可能性がある。業務内容に合わせて早めにインスリン注射の準備を行う事もあり，誤った方法に気付かずに行っていることもある。そのため勉強会前の正答率が低かったと考えられる。

6．結論

1）勉強会への参加を促す方法の検討が必要。

2）サポートチームによる勉強会の開催は，看護師のインスリン知識の向上に効果があった。

3）前後共に作用に関する知識が最も不足している。

4）手技については，全ての看護師が確実な知識を習得できるように関わる必要がある。

7．引用・参考文献

1）R Core Team R: A language and environment for statistical computing. R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria. ISBN 3-900051-07-0, URLhttp://www.R-project.org/., 2012

2）大倉瑞代：インスリンの事故防止に役立つ知識．看護学雑誌，70/10，900－906，2006

3）西窪陽子ほか：インスリン自己注射勉強会の評価と今後の看護師教育の課題．糖尿病，53（2），132

4）小沼真由美ほか：院内インスリン療法勉強会の効果 - 看護師へのアンケート調査を用いた検証 - ．日本糖尿病教育・看護学会誌，9，179